卒業生・修了生 思い出インタビュー

＊氏名に続いて学科、所属ゼミ

所属部（サークル）・出身校・進路など

学部

スポーツ取材で伝える喜び知る

佐山　竜太さん

真っ先に思い返されることは「専大スポーツ」の活動です。高校で所属していた野球部の活動が掲載された雑誌を読み、伝える側に興味を持ったことがきっかけでした。

初めて載った記事が準硬式野球部の試合結果を伝えたもので、小さな記事でしたが、切り抜いて今でも保存してあります。その後も担当し、関東地区大学選手権で優勝した時は自分のことのようにうれしかったです。

2年次には「専Sation」というフリーペーパーを立ち上げ、創刊号、第2号を制作。創刊に携わり、ゼロからモノを作る楽しみや、やりがいを味わえたことは、良い経験になりました。就職先でもパッケージデザインなどの"モノづくり"に携わりたいと思います。

行動力広げた海外留学体験

岩淵　佳奈さん

入学前から海外に興味があり、専大に進んだのも留学制度が整っていたからでした。この制度を利用して3年次の前期に4カ月間、ニュージーランド・ワイカト大学に留学し、貴重な体験をすることができました。現地では、ホストファミリーに海に連れて行ってもらって親密になったり、語学学校でのインターンシップでの経験を通じ、自然に自分から行動できるようになり、「壁を作らないこと」「可能性の選択肢を広げること」の大切さを学びました。

経済学部の先生方には就活で大変お世話になりました。エントリーシートを読んでアドバイスをいただいたレポートを添削してもらったりしました。そのおかげもあって、就活を積極的に進めることができ、希望する会社から内定をいただくことができました。

固執せず、新たな価値観を学ぶ

瀬谷　瑠津さん

大学での勉強は、自分が育ってきた環境によって植えつけられた固定観念との戦いでした。物事の見方にとらわれ、当たり前だと思っているものが多様な方向性を狭めていることに気付きました。こうした固定観念を取り払うことで、新たな視点で、より深い考察ができるようになったと思います。

勉強とは、やはり幾つになっても苦痛を伴い我慢を強いられる作業です。しかし、無知ということほど無力で怖いものはなく、これからも生きている限り、勉強からは離れられないものだとつくづく感じました。

最後に、これまで私を支えてくれた家族、公私共にお世話になった伊吹克己先生、上原正博先生、唐鎌直義先生はじめ、熱心にご指導くださった諸先生方にこの場を借りて感謝申し上げます。

留学体験2度 客室乗務員に

小林　桜子さん

出不精だった私にとって、2度の留学が転機となりました。2年次の春にニュージーランドへ、4年次の春にカナダへ、いずれも休暇期間を利用して私費で留学しました。現地でシンガポール航空のCA（キャビンアテンダント）をしていた方と知り合うことができ、以前から抱いていたCAになるという夢は一層大きなものになりました。また、「自分から学ばないとダメだよ」と諭してくれた友人の存在も忘れられません。

就活は「後悔しないよう、今を頑張るしかない」という思いでやり抜きました。その結果、広い世界を見ることができ、さまざまな人と出会える、あこがれの職業が現実のものとなりました。いまのこの一瞬を無駄にすることなく全力でぶつかることが将来の自分を構成する大事な材料になることをこの4年間で学びました。

講座と授業両立 故郷で公務員

萩原　将太さん

だれかのために役立つ仕事がしたい、それには公務員がいちばんだと考え、勉学に力を入れてきました。授業は毎回欠かさず、遅刻もしないで、履修科目の単位はすべて取得しました。後期試験前はエクステンションセンターの公務員試験講座と授業の両方で厳しい毎日でした。夜11時くらいまで大学に居残って勉強したことも良い思い出です。

念願かなって卒業後は札幌市役所で働くことになりました。都内の区役所からも内定をいただいたのですが、地元のために働きたいという思いと、道全体に影響力のある最大の自治体で街づくりに携わることができる点にやりがいを感じ、こちらに決めました。バイト先で学んだ「お客さまの立場に立って考える」という視点を忘れず、仕事に取り組んでいきたいと思っています。

警察官として弱い人支える

飯野　瞳さん

在学中にたくさんのボランティアを体験しました。神田キャンパスのある千代田区で障がい者を支える活動や、インドでマザーテレサの施設「死を待つ人の家」で傷ついた人々の支援などです。

そんな活動のきっかけとなったのは1年次の時、カンボジアのゴミ山で学校にも行かず真っ黒になって働く子どもたちを視察するNGOに参加したことです。大きなショックを受け、世界にはこんな子どもたちが存在することを、日本の同世代に伝えたいと、川崎市の小学校で子どもたちに体験発表をしました。

所属した国際貢献を目指すサークル「S・I・A」は、代表を務めた時に念願の公認サークルに。信濃育英会から奨学金をいただきネパールへ。恵まれない女性たちのシェルターを訪ね、卒論のベースになりました。

卒業後は故郷に戻り、警察官として社会的に立場の弱い人を支えていきたいと思っています。専大で体験した一つひとつは、忘れられない思い出です。

弁護士を目指し法科大学院進学

渡邊　洋美さん

法律事務の仕事をしていたため、きちんと法律を勉強しようと考えて入学しました。各講義のクオリティーが高く、知識を深めることができました。中でもゼミ活動が印象に残っています。普段のゼミだけでなく、年1回のゼミ合宿にも欠かさず参加し、先生やゼミ生と議論することで、回を重ねるごとに自分が成長していく手応えを感じることができました。

同じ講義を履修するメンバーで二部体育祭に参加し、バスケットボールで優勝したことも思い出に残っています。

卒業後は学業に専念し、司法試験合格を目指して法科大学院に進みます。仕事の幅を広げ、弁護士として活躍できるように頑張ります。

「新聞奨学生」で走り続けた4年

斉藤　祐一さん

新聞奨学生として新聞配達をしながら勉強に励み、走り続けた4年間でした。初めは生活のリズムがつかめず、戸惑いましたが、次第に時間をうまく使えるようになると、持ち前の負けん気から「配達のミスをゼロにしよう」。勉強も頑張ろう」とさらに力が入りました。その結果、配達率・集金率100％を達成し毎年、新聞社から表彰を受けました。最後まで継続できたことで、今後どのような困難に直面しようとも頑張れる自信がつきました。

また、配達や集金を通し、お客様と触れ合う機会が多く、社会勉強にもなりました。就職が決まり、配達先やお世話になった方にあいさつにうかがいましたが、皆さんから「頑張って」と温かいエールをいただくことができました。「この4年間は間違っていなかった」と胸を張って卒業できます。

日々が学びの場 職業体験で成長

貝瀬　諒さん

1年次に仲間でつくったサークルが鳳祭に初めて出店し、「パンの耳付きコーンスープ」で、予想以上の売り上げを記録できたことは良い思い出になりました。

2年次には、新潟県佐渡市の観光バス会社で2週間のインターンシップをしました。このとき、多くの外国人観光客が訪れる「アース・セレブレーション」という大規模なイベントにスタッフとして参加。英語でチケットを売ったり、裏方の仕事を手伝ったり、日々が学びの場となりました。

常に向上していきたいという姿勢を貫いたことが、小沢ゼミでゼミ長としてメンバーをまとめる力になり、就職にもつながったと思います。ゼミ仲間とお互いに意識を高め合い、ゼミの同期生全員が内定を得たことはゼミ長として大きな喜びです。小沢先生には心から感謝しています。

考える力鍛え就活に生かす

坂本　知花さん

ゼミでは、公共的側面をもつ経営戦略に興味を持ち、「介護ビジネスの経営戦略」を個人研究のテーマにしました。研究を進めるうえで仲間と協力し合うことの大切さを学び、先輩からは理論的なアドバイスだけでなく、「自分だったらどうするか」という視点で主体的に考える力を鍛えていただきました。また、バイト先では売上目標を立て、達成に向け仲間と結束を高めて結果を出すなど、授業で学んでいたことを社会で生かせたことが自信につながりました。

就職活動では、就職課の方に教えられた「3K（汗をかけ、文字を書け、恥をかけ）」を実践。製薬会社のMRに興味があったので、病院に足を運んで職員の方にお話を伺うこともできました。小沢先生に教えていただいたことは、社会人として生きて行くうえで心の支えになると思います。

仲間と家族の支えで「起業」

切明　佳弘さん

池本正純先生の講義で卒業生を含む多彩な起業家の経験談を聞き、そのネットワークに参加しているうち、漠然としていた「起業」という夢を実現させたいと強く心に持ち、すべての事を「勉強」と考えて取り組むようになりました。

「Kirimaru」は昨年7月から準備を始め、9月末にオープン。高校時代の友人にプランを話したところ、ふたつ返事で上京してきてくれ、店舗選定や仕入れ先確保など、試行錯誤しながら駆け抜けてきました。出前は必ず時間を守ることをモットーに、口コミでリピーターも増えてきています。お客様とのコミュニケーションと笑顔が最大の喜び。今後は、広島お好み焼きを多くの方に手軽に食べていただくために、多店舗化と人材育成を考えています。

勇気と決断、そして仲間と家族の協力で夢への一歩を踏み出すことができました。

多くの価値観に出合った4年間

島　俊一さん

全国から専大に集まった多くの人と出会い、いろいろな価値観に触れて刺激を受け、大きく成長できたと実感しています。小林ゼミの研修で、社会人として活躍する先輩たちの発表を聞いたことはとても印象に残っています。いろいろな経験からくる高い見識や発表の力というものに圧倒され、視野が広がりました。

4年間、1単位も落とすことなく修得することを最低限の目標としていたので、その目標を達成できたことを誇りに思っています。

就活では、面接のあと必ず振り返りをして次につなげることで、1社終えるごとに確かに成長している手ごたえを感じることができました。いま確実に言えることは、最初に大学名と自分の名前を明るく元気よく言うことができれば、面接はうまくいくということです。

幅広い知識を郷里のために

古市　尚子さん

簿記の勉強のため、エクステンションセンターの講座を受講、日商簿記検定2級を取得、会計の勉強が楽しくなりました。ゼミでは、財務会計の幅広い知識を吸収することができました。国際会計（会計事情の最先端）に着目し、他大学との発表会にも取り組み、週2回と春期・夏期休暇も利用して頑張りました。菱山先生からは「常に考えること」を学び、ゼミ仲間と切磋琢磨しながら充実した勉強を続けることができました。

就職は郷里の福井を活性化し、福井のために何かしたい、という思いから新聞社という地域性・公共性が高い職場を選択しました。内定をいただき、真っ先に両親に報告したところ、私以上に喜んでくれて感激しました。配属は未定ですが、専大での4年間を励みに頑張ります。

共に学ぶ社会人 学業継続の励み

佐々木　創さん

人との出会いに恵まれ、友人たち、先生方に大変感謝しています。

仕事での経験を学びに結びつけることで理解を深めることができましたが、時間的にも体力的にもきつく、続けていくか悩んだ時期もありました。

そんな時、最後まで続けようと、前向きな気持ちになれたのは、同じ社会人として学ぶ仲間に出会えたからです。エネルギッシュな方たちばかりで、とても励みになりました。また、他業種の方と意見を交わすことでさまざまな分野の話を聞き、視野を広げることができました。

ゼミで取り組んだ経営者論をはじめ、講義で学んだ成果を、今後の仕事に生かしていきたいと思います。

「言葉」教える喜びを知った

丁（ジョン）　妍娟（ヨヨン）さん

韓国で日本のTVドラマや歌にはまり、日本文化が大好きになり、留学しました。専大を選んだのは2年間通った日本語学校の先生から「あなたの先輩が優秀な成績で卒業した。いい大学ですよ」と勧められたからです。

キャンパスでの交流や思い出は数え切れません。日本語の授業についていくのが大変で、第三言語である中国語の授業は「泣きながら」でした。しかし、努力が成績に表れると自信につながりました。

09年、世界的不況から円高ウォン安が進み、韓国の留学生が次々と帰国する中、両親と奨学金、日本人の優しさに支えられました。長野県出身の同級生のお母さんからお米をどっさり送っていただいた時はどんなにうれしかったか。4年次から国費留学生となり、安心して勉強に打ち込めるようになりました。

ゼミの備前徹先生、留学生指導の王伸子先生、中国語の土屋昌明先生…温かい先生方に恵まれました。

ボランティアで韓国人や中国人に日本語を教え、日本人に韓国語を教えています。実践で言葉を教える喜びを知ったことは、日本語教師を目指す貴重な礎になりました。

陸上で学んだ継続の大切さ

小俣　翔さん

箱根駅伝にあこがれて、陸上競技部に所属しました。練習はとてもハードで、朝練は5時半から7時ごろまで。ほぼ毎日約14キロ走りました。午後は授業の後、16時ごろから約20キロの走り込み。スポーツ推薦の部員たちとのレベルの違いを感じることが多く、初めは練習についていくことさえできませんでした。

1、2年次はけがに悩まされ、何度かやめようと思ったこともありましたが、3年次からようやく力が付いてきて、部内の駅伝選考レースに出られるまでになりました。残念ながら、本番の箱根駅伝にはマネージャーとしての参加でしたが、それでも最後まで仲間と一緒に戦えたのは最高の思い出です。

学業と陸上との両立はつらい時もありましたが、努力して念願の教育職員免許状を取得することができました。

友人とともに異文化を体験

石川　南さん

本学の海外研修・国際交流奨励制度で得た経験は、私にとって大変貴重なものになりました。1年次に、同じ学部の友人2人と「マレーシアの観光地としての経過や今後の展望について」のテーマが認められ、奨励金を得てマレーシアへ渡航。3年次にも、同じ友人たちと「アメリカでの日本のマンガ文化の普及について」をまとめて奨励金をいただき、ロスで現地調査を行いました。

海外研修では、メディアやネット情報を鵜呑み（うの）にせず、自分の目で確かめることの重要性と、他国の文化に臨機応変に対応する必要性を学びました。一緒に旅をし、レポートをまとめた2人は、心の内をさらけ出し、気持ちを伝え合える、かけがえのない友人になりました。卒業後も友人とのきずなを大切にし、頑張っていこうと思います。

大事件の舞台調査し卒論に

川島健太郎さん

神戸連続児童殺傷事件（1997年）の現場である神戸市の北須磨団地。その自治会活動を卒論テーマにし、重大な事件を経験した地域が、防犯やまちづくりに力を入れる様子に焦点を当てました。

事件の犠牲者は私と同世代。前から深い関心を持っていました。

この地を3回訪ね、自治会役員から聞き取りを行い、夏まつりにも参加。思わぬ人間関係が生まれ、神戸新聞の取材も受けました。

自治会は事件前から児童の登下校中の見守り活動やイベント活動などコミュニティーづくり、そして「あいさつ」「声かけ」運動などにも取り組んでおり、事件を機に、その姿勢が確固としたものになったと思いました。防犯は人と人とのつながりが大切だと強く感じました。

「まち歩きから見えてくるものがある」―ゼミの大矢根先生のことばを深くかみしめた調査でした。

積み上げた知識表現する知性

栗橋　翠さん

「自動車関係で新しいものを作りたいなら情報系の大学に行ってみると面白いかもな…」という何気ない高校の先生の言葉をきっかけに入学した本学部でしたが、予想外に多くのことを学べただけでなく、「世界にない新しいものを作る仕事がしたい」という願望から目指していた大学院進学という目標も達成できたことに非常に満足しています。

工業高校機械科出身の私にとって、情報という異分野の学問を学ぶことや総合大学に集まるさまざまな人々と過ごした4年間は戸惑いの連続でもありましたが、そのまま工業大学に進学してしまっては得ることができなかった貴重な経験でした。

単位・学年・専門分野という垣根を越えてチームで挑戦したIT技術コンテスト Imagin Cupでは、日本大会決勝での準優勝という結果以上に世界的視野をもつことや積み上げた知識を構成し表現する知性を得ることができたと思っています。

準硬式野球部で文武両道を貫く

根本　翔さん

準硬式野球部は文武両道を基本に、監督と連携を保ちながら4年次生が中心となって、チームを引っ張ってきました。専用グラウンドがない条件でも、4年連続で全日本学生選手権に出場し、3年次のときに準優勝できたことを誇りに思います。最後まで本気で戦い、涙し、思い切り野球ができたこの4年間は、かけがえのない人生の1ページになりました。後輩たちには「つらいときこそポジティブに考え、前を向いて互いに道を切り開いていこう」を合言葉に、芯の強い選手・集団になってほしいと思います。

これからは社会人として、専大で培った人間力を土台に、今まで支えてくれた周りの人たちの期待に応えられる営業マンに成長し、社会に貢献したいと思っています。

仲間と協力する大切さを学んだ

小林麻理奈さん

テニスサークルに所属し、2年次から合宿やイベントの企画を担当。その経験が自分を人間的に成長させてくれました。仲間と意見をぶつけ合い、60人のメンバー全員が楽しめる企画を考えることで、周りの人の気持ちをくんで物事を進められるようになりました。

プロジェクトでは人間の声から感情を読み取り、それを色や形で表現する研究を行いました。読み取った感情を携帯ストラップや置物にするという難しいテーマに挑み、そこでも企画を担当しました。ネーミングや動かし方などのアイデアを出したり、プログラム担当者と作品素材担当者の橋渡し的な役割も担いました。

サークルやプロジェクトでの企画担当を通じて、仲間と協力して何かを成し遂げる大切さを学べたのは、大きな財産だと確信しています。

大学院

恩師に導かれ大学の教壇に

呉　大忠さん

中国広州市から96年に来日。短期大学を卒業し、会社勤めをしていましたが、大学卒の必要性を切に感じました。

留学中、社会福祉に興味を持ち、明海大学を卒業後、同大学院修士課程を修了。さらに研究を深めようとしていたところ、専大にはその分野の大変素晴らしい先生がいらっしゃると聞きました。指導教授になっていただいた社会保障の唐鎌直義先生です。

専大での思い出は、博士論文を書き上げたことに尽きます。故郷の農村で調査・分析し、中国の貧困対策は社会福祉制度の充実の必要性にあると日本と比較し提言したものです。

7年間かかり、苦労の連続でしたが、コツコツと一つひとつ積み重ねていきました。唐鎌先生とその後、指導教授になっていただいた高橋祐吉先生、さらには福島利夫先生、大橋英夫先生と多くの先生から導いていただき、感謝の気持ちでいっぱいです。

中国に戻り、今年9月から大学の教壇に立ちます。自分の専門にさらに磨きをかけなければなりません。卒業の日はさらなるスタートの日です。

半分は日本人 恩返ししたい

趙（ちょう）　沛霖（はいりん）さん

「中国を離れて世界を見たい」という夢がふくらみ日本に留学。杏林大学に入学しました。「ドラえもん」「ドラゴンボール」など小さいころから日本の漫画や映画に親しんでいたことも留学の大きな理由です。

専大大学院入学は、杏林時代、のちに指導教授になっていただいた田中隆之先生の『現代日本経済―バブルとポスト・バブルの軌跡』を読んだことから。ファイナンスコースで研究を重ね、修士論文を書き上げる大事業を成し遂げられたのは、先生のきめ細かいご指導のおかげです。卒業後は北京で証券会社か投資会社に就職する予定です。

在日7年。中国との違いに戸惑うこともありましたが、今、半分日本人になったような気がします。東日本大震災では大きな被害に立ち向かい、困難な状況でも規律を守り、他人を思いやる日本人の姿に感動しました。中国から支援を考え、恩返しをしたいと思っています。

法科大学院

愛の"ムチ"に合格で応える

森田　健人さん

国公立の法科大学院2校に合格していましたが、専大の入学前導入授業で先生方のあふれんばかりの情熱に接し、「この大学はほかとは違う。学ぶのならここだ」と決めました。

その印象は入学してさらに強くなり、確信となりました。厳しくも愛情あふれるご指導に応えようと、我を忘れて勉強し、論文を書いた2年間でした。課題は誰よりも早く提出しようと心がけました。

明解かつ完璧なパワーポイントで授業された良永和隆先生、こちらの質問に1時間以上かけて答えてくださった小出錞一先生、確実な答弁の仕方、プロとしての論文の書き方を徹底的にたたきこんでくださった検事で客員教授の沖原史康先生……。一緒に学んだ仲間たちとともに、厳しい先生方の愛のムチに時には泣きべそをかきながら頑張りました。

そんな熱意に、「司法試験合格」という形で応えたい。さまざまな分野に興味を持ち、特に医療過誤問題に尽くしたいと思っております。専門を持ったリーガルジェネラリストを目指します。

2010年度　専修大学卒業生数

学部	学科・専攻		一部	二部	計
経済	経済		573	106	884
	国際経済		205	-	
法	法律		627	131	901
	政治		143	-	
経営	経営		644	-	644
商	商業		24	13	867
	マーケティング		517	95	
	会計		218	-	
文	日本語日本文学	日本語学	75	-	713
		日本文学文化	122	-	
	英語	英米文	164	-	
	人文	哲学人間学	66	-	
		歴史学	86	-	
		環境地理学	50	-	
		社会学	86	-	
	心理		64	-	
ネットワーク情報	ネットワーク情報		251	-	251
合計			3915	345	4260

2010年度　大学院修了者数

研究科	専攻・コース	修士課程	博士後期課程	計
経済学	経済学（下記以外）	12	1	16
	経済学（ファイナンス）	3		
法学	民事法学	-	0	15
	公法学	-	1	
	法学	14	-	
文学	日本語日本文学	10	2	44
	英語英米文学	7	0	
	哲学	1	0	
	歴史学	8	0	
	地理学	3	0	
	社会学	2	0	
	心理学	11	0	
経営学	経営学（経営学）	17	0	18
	経営学（情報管理）	1	0	
商学	商学（アカデミック）	4	1	21
	商学（ビジネス）	15		
	会計学（アカデミック）	1	-	
	会計学（プロフェッショナル）	0		
合計		109	5	114

※上記修了者の他に、学位規程第14条第1項のただし書きによる学位取得者が1人（商学研究科商学専攻）います。

2010年度　専門職学位課程修了者数

法務研究科	法務専攻	46